

輸入種苗ヒレナシジャコ

Tridacna derasa の予備飼育

村越 正慶

1. 目 的

沖縄本島・北部 (26° 30' N, 127° 50' E.) での、輸入種苗ヒレナシジャコ成育の可能性。

2. 材料及び方法

材料は県内のクルマエビ養殖業者 (名護市) によって、ベラウ共和国 (旧国名: パラオ共和国) より試験輸入されたヒレナシジャコ種苗を用いた。

稚貝は死んだ枝サンゴ片等を敷いたプラスチックかごに入れて、2.75トンFRP水槽に収容した。深さは、水面からサンゴ片底面まで約12cmであり、注水は水面上からシャワー式にした。

飼育は平成元年7月30日から開始した。飼育開始時の稚貝の大きさは殻径72mm、個数は30個体であった。

3. 結果及び考察

夏季から秋季にかけては1個体の死亡もなく推移した。11月下旬から外套膜の色調が薄くなったり、萎縮したり、入水孔部から鰓が見える等の変調個体の出現が、観察され始めた。12月から1月にかけて、29個体が死亡した。その後残りの1個体も死亡した。流水水槽の水温は、7月から9月までは25.7~27.7°Cであり、10月は上旬の25.7°Cから下旬の24.2°Cまで徐々に下降し、11月は23.1°C、12月は20.9°C、そして、1月には15.8~20.2°Cの範囲で、月平均が19.3°Cであった。

稚貝は足糸でサンゴ片に付着しているので、途中の殻径測定は行わなかったが、その成長は夏季に良く、秋季以降は鈍化しているのが、貝殻表面から伺われた。死亡時点での殻径は、83.7~98.7mm、平均88.7mmであった。

死亡原因は、実験場所の冬季の低水温、日照量不足等からの派生が考えられる。

ヒレナシジャコは、オーストラリアではその分布は、塩分と濁度の影響を受け、岸から離れた場所に多い (Braley 1987)。石垣島 (24° 20' N, 124° 09' E.) 周辺でのヒレナシジャコ生息状況は、筆者の聞き取り調査では、小浜島及び石垣市登野城の潜水漁業者は、年に1~2個体は見るとし、その生存は確認されている。また併行して実施したヒレナシジャコの生体入手状況は、八重山群島の石西礁湖内の昭和49~59年までの調査で1個体、昭和59~62年までの買い取りで4個体と合計5個体であった。尚、入手個体は石垣島・川平湾へ移植を試みた (村越未発表)。

これらのことから総合すると、本県でのヒレナシジャコ稚貝の冬季の飼育は、八重山群島の石西礁湖海域と類似した環境条件を持った場所で、再試験を試みる必要があると考えられる。また、死亡の主原因を冬季の低水温と考えて、沖縄本島周辺で本種の養殖を指向するならば、発電所の温排水利用も含めた加温による稚貝飼育も検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Braley, R.D. 1987. Distribution and Abundance of the Giant Clams *Tridacna gigas* and *T. derasa* on the Great Barrier Reef. *Micronecia* 20:215-223.